る。名譽心といふものは實に恐ろしい力を以つてゐるものである。

研究所日記

榎　の　人

二月八日月曜日　快晴

雨村君變聲をはり上げて「ソレ達人は大觀す」と得意の琵琶歌をうなり出す、爲に屋内震動せんばかりなり。

二月九日火曜日　曇

望月川上の兩君スケツチ箱をヒツかつぎ三脚をカタ手に又カタ手に四つ切の畫板をもち室内用の大なる畫架を肩にかけ、辨當を腰にブラさげ寫生に出發せしは振つていたり。

二月十日水曜日　晴

望月君、例によつて室内用の畫架を持ち寫生に行かんとす、時に傍にありたる鈴木君曰く「ヨシ給へ君！ソンナ大きな畫架を持て行かなくつてもいゝじやないか、若し忘れてきたなら赤城サンにでもかりてやら、然しブリたきや持て行き給へ」と、さすがは鈴木君なり。ナンゾその言の皮肉なる。

二月十一日木曜日　曇

紀元節なれば研究所休みなり。何れの石膏も皆ニコヤカならん蓋紀元節並に憲法發布二十年紀念を祝して。

二月十二日金曜　曇後晴

河合先生アマリ早く見えたれば皆大に狼狽す、洋行歸りの岡精一氏參觀に來らる。

二月十三日土曜　晴

清水君曰く「昨日は地震が、いつたれ」と、又語をついで曰く「地震がユクト電氣の玉の中にある針金が一番よく動く」と、時に稀代のシヤレ男たる鈴木錠吉君曰く「僕の家の電氣は地震がいつても動かない」と皆あやしんで其の故を問ふ君答へて曰く僕の家の電氣はオヤジだもの」と、思はず皆をして腹をかゝへしめたり。

十四日日曜

今日は別科の日なり。本科と異てあたかも火の消えたるが如く靜かなり。時々何處よりか筑前琵琶を習ふ聲聞ゆ。

紹　介

◎彗星　四六倍判六十四頁の頗る威勢よき月刊雜誌にして政治文學其他あらゆる方面に向ひて縱横論談を檀にせり初號のことゝて多少雜駁の感あれど案を拍つの文字も少なからず諷刺的漫畫もまた出色のものあり（毎月二十日發行一册十二錢、東京府下田端彗星社）

◎水彩鳥　長谷川利行氏主として編輯せらるゝ菊判十六面の小册子にして和歌俳句及美文を滿載せり、（一册發行費六錢、和歌山縣有田郡廣村狛方水彩鳥會）